

《六つの四重奏ソナタ》(1808年)改訂版¹ 水谷 彰良

六つの四重奏ソナタ [六つの弦楽ソナタ] *Sei sonate a quattro*

——第1番(ト長調) 第2番(イ長調) 第3番(ハ長調) 第4番(変ロ長調) 第5番(変ホ長調) 第6番(ニ長調)

作曲 1808年(成立年は近年まで1804年とされたが、全集版により推定年が1808年に変更。解説参照)

初演 不明 註:後年ロッシーニが筆写譜に記した自筆のコメントによれば、ラヴェンナ近郊のアゴスティーノ・トリオッシの別荘。解説参照)

編成 2 ヴァイオリン、チェロ、コントラバス

演奏時間 第1番:約13分、第2番:約13分、第3番:約12分、第4番:約14分、第5番:約14分、第6番:約15分

自筆楽譜 消失または未発見 註:ロッシーニのコメントと追加訂正を含む重要な筆写譜がワシントンの議会図書館に所蔵(Washington, Library of Congress, ML 96 R8)。

初版楽譜 Milano, Gio. Ricordi - Firenze, Ricordi, Pozzi e C^o., 1828. (第3番を除く5曲。編成は2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ。従来の刊年推測は1825-26年)

Carisch, Milano, 1951. (第3番のみ。前記筆写譜に基づく初版)

Quaderni Rossiniani I, Fondazione Rossini, Pesaro, 1954. (オリジナル編成による第1、2、4、5、6番の初版。全6曲の完本初版)

現行版 *Quaderni Rossiniani I*, Pesaro, 1954. [総譜]、Ludwig Doblinger, Wien-München, 1974. [パート譜]、1977. [総譜]、他に Zanibon (Padova) などがあり、下記全集版にはパート譜も含まれる。

註:エディション間に速度表示の異同あり²。正確なそれは下記全集版参照。

全集版 IV / 4 《Sei sonate a quattro》(Matteo Giuggioli 校訂。Fondazione Rossini Pesaro, 2014.)

構成 全6曲(各曲は三つのテンポからなる)全集版に準拠

- 第1番** 1) ト長調、4/4拍子、モデラート
2) 変ホ長調、3/4拍子、アンダンテ
3) ト長調、6/8拍子、アレグロ
- 第2番** 1) イ長調、4/4拍子、アレグロ
2) ニ短調、4/4拍子、アンダンテ
3) イ長調、2/4拍子、アレグロ
- 第3番** 1) ハ長調、4/4拍子、アレグロ
2) ハ短調、4/4拍子、アンダンテ
3) ハ長調、2/4拍子、モデラート
- 第4番** 1) 変ロ長調、4/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ
2) ト短調、4/4拍子、アンダンテ
3) 変ロ長調、2/4拍子、アレグレット
- 第5番** 1) 変ホ長調、4/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ
2) 変ロ長調、3/4拍子、アンダンテ
3) 変ホ長調、2/4拍子、アレグレット
- 第6番** 1) ニ長調、4/4拍子、アレグロ・スピリトーズ
2) ヘ長調、3/4拍子、アンダンテ・アッサイ
3) ニ長調、4/4拍子、テンペスタ [Tempesta]。アレグロ

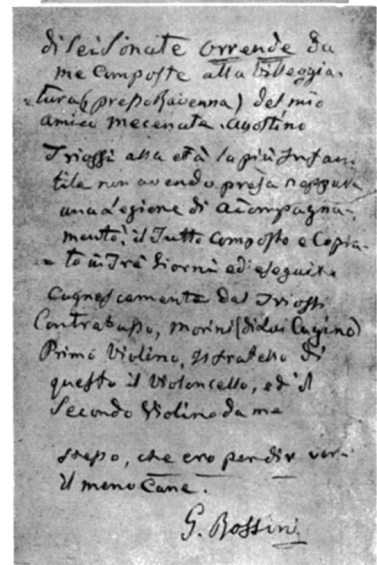
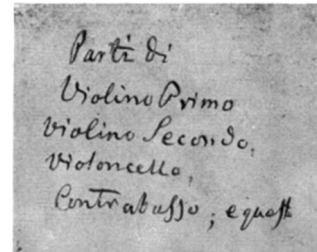
解説

ロッシーニ最初のまとまった器楽作品となる全6曲の弦楽四重奏曲(訳題に《六つの四重奏ソナタ》を採用したが、通

例《六つの弦楽ソナタ》と称される)。従来の文献では1804年夏、12歳のロッシーニが友人でパトロンのアマチュア・コントラバス奏者アゴスティーノ・トリオッシ (Agostino Triossi, 1781-1822) のラヴェンナ近郊の別荘で作曲初演したとされたが、2014年に成立した全集版の校訂者マッテオ・ジュッジョーリ (Matteo Giuggioli) の研究により1804年成立の根拠とされた筆写楽譜における年号と年齢がロッシーニによる書き換えであることが明らかになり、1808年16歳の作とするのが妥当との見解が示された (詳細後述)。

自筆楽譜を消失したこの弦楽四重奏曲は、第3番を除く5曲の初版楽譜が、ヴィオラを加えてコントラバスを含まない通常編成の《二つのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための五つのオリジナルな四重奏曲 (Cinque Quartetti originali per due violini, viola e violoncello)》として1828年にミラーノのリコルディ社から出版された³。その後は第三者によるフルート四重奏編曲や、フリードリヒ・ベアー (Friedrich Beer, 1794-1838) 編曲のフルート、クラリネット、ホルン、ファゴットの四重奏ヴァージョンで流布した。

オリジナル編成がヴィオラではなくコントラバスを含み、全6曲あると確認されたのは、1930年代後半にワシントンの議会図書館で筆写譜の完本が発見されたことによる。この筆写譜は四つの楽器のパート譜を合冊したもので、それぞれのタイトル頁に第三者の筆跡で「12歳のジョアキーノ・ロッシーニ氏が1804年にラヴェンナで作曲した六つのソナタ作品 (Opera di sei Sonate / Composta / Dal Sig.^r Gioachino Rossini / in età d'anni XII. / in Ravenna, l'Anno 1804)」と書かれている⁴。全集版序文は、自筆楽譜とその筆写譜をロッシーニが所有しており (共に未発見)、ワシントンのパート譜完本はそのどちらから筆写されたと推測している。このパート譜はロッシーニの死後、1873年に未亡人オランプ・ペリシエが第一ヴァイオリンのパート譜の余白に「私の素晴らしい友に、友情の記念として贈る。ロッシーニ未亡人 O [オランプの頭文字]、1873年3月22日、マッツオーニ氏へ (Offert à mon excellent / ami, en souvenir d'amitié / O.V.ve Rossini / ce 22 Mars 1873. / à Monsieur Mazzoni)」との献辞を付してピエートロ・マッツオーニ (Pietro Mazzoni) に贈られた⁵。続く頁には、ロッシーニの自筆で次のコメントが書かれている——「第一ヴィオリーノ [ヴァイオリン]、第二ヴィオリーノ、ヴィオロンチェッロ [チェロ]、コントラバス [コントラバス] のパート譜。この六つのひどいソナタは、私がまだ通奏低音のレッスンすら受けていない少年時代に、パトロンでもあった友人アゴスティーノ・トリオッシの [ラヴェンナ近郊の] 別荘で作曲したものである。すべては3日間で作曲・写譜され、コントラバスのトリオッシ、[彼の従兄弟で] 第一ヴィオリーノのモリーニ、その弟のヴィオロンチェッロ、そして私自身の第二ヴィオリーノによって実にへたくそに演奏されたが、実を言えばその中で私が一番まともであった。G. ロッシーニ」。



手稿譜におけるロッシーニ自筆の添え書き

従来文献が成立年を1804年、12歳の作としたのは各タイトル頁の記載に基づくが、全集版序文は「età d'anni XII. (12歳)」の [XII] が最初に書かれた「XVI (16)」の、年号「l'Anno 1804」の「1804」が最初に書かれた「1808」のロッシーニ自身による周到な書き換えであり、パート譜の用紙の透かしが1808~12年のロッシーニのボローニャ初期作品の筆写譜と同じことから、1808年に16歳で作曲したと判断している。題名も筆写者が付した「Quartetto/i (四重奏曲)」を嫌ってロッシーニ自身が「Sonata/e (ソナタ)」に書き換え、強弱記号やクレシェンドの文字もロッシーニが加筆していることが明らかにされた。

成立年と関わる書き換えは第三者による誤謬の訂正ではなく、ロッシーニが自分を神童とみせるための作為と思われる。「私がまだ通奏低音のレッスンすら受けていない少年時代に」「3日間で作曲・写譜された」とのコメントも、偽装を補強するための付記と考える。1808年の作曲ならロッシーニはボローニャの音楽学校に在籍して学友とミサ曲を共作し、カンタータ《オルフェーオの死によせるアルモニニアの涙》も作曲しているからである (数字低音も10歳からマレルビ神父に師事して学んでいた)。それゆえこうした詐称も、ロッシーニ晩年の「老いの過ち」と言って良いだろう。

12歳ではなく16歳の作であっても、《六つの四重奏ソナタ》が早熟の証となる名作であることに変わりはない。全6曲はそれぞれ急〜穏〜急のテンポ [以下、楽章と表記] からなり、四つの楽器を対等に扱い、各楽器の特性を活かして活躍させ、トリオッシへの配慮からコントラバスに独自の役割を与えた点に特色がある。その音楽にウィーン前期古典派の影響を指摘する者もいるが、純粋なソナタ形式を採らず単一主題とその自由な発展に委ねる点でサンマルティーニやボッケリーニなどのイタリア室内楽の系譜に連なり、旋律の瑞々しさ、名技性への憧れ、機知と

抒情性に若きロッシーニの才気と個性の片鱗が聴き取れる。興味深いのが第6番第3楽章テンペスタ (Tempesta) の自然描写で、夏のイタリアで頻繁に遭遇する短時間の嵐 [テンポラーレ] が巧みに音楽化され、後のオペラ (《試金石》《セビーリヤの理髪師》その他) の嵐の音楽の原点に位置する。第2番第2楽章の序奏冒頭は、ルーゴに現存する〈キリエ (Chirie)〉の自筆楽譜 (A.49) の序奏冒頭にその原型が認められる (水谷による指摘)。

全6曲の完本初版は1954年にロッシーニ財団によって出版されたが (Quaderni Rossiniani I, Fondazione Rossini, Pesaro, 1954.)、速度表示などに正確さを欠き、その後の諸版においても整合性を欠く部分がある。それゆえ作品の成立を含めた正確かつ完全なエディションは2014年成立のロッシーニ財団の全集版が最初であり、その批判校訂版第一次校訂譜による初演奏も2014年8月15日、ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティバルにおいて行われた (第一ヴァイオリン: サルヴァトーレ・アッカルド、第二ヴァイオリン: ラウラ・ゴルナ、チェロ: チェチーリア・ラディック、コントラバス: フランコ・ペトラッキ)。



2014年8月15日 ROF プログラムと
全集版《六つの四重奏ソナタ》

推薦ディスク

- ・サルヴァトーレ・アッカルド (Vn)、フランコ・ペトラッキ (Cb) ほか (1978年10月録音、Philips PHCP 20357/8 [3608/9])

註: モダン楽器による名演・名盤。

- ・アンサンブル・エクスプロラシオン (Harmonia Mundi HMC 901776 及び 901847 [キングインターナショナル KKCC-481 及び 514])

註: ピリオド楽器による演奏。国内盤の解説は筆者執筆。



- 1 初出は『ロッシニアーナ』第33号所収「ロッシーニ全作品事典 (25) ロッシーニの器楽曲①」。改訂版を2015年1月に日本ロッシーニ協会ホームページに掲載したが、全集版に基づいて増補改訂したヴァージョンをここに再掲載する (2016年4月)。
- 2 異同の詳細は、水谷彰良「ロッシーニ《六つの四重奏ソナタ》に関する覚書」を参照されたい (日本ロッシーニ協会ホームページに掲載済み。http://societarossiniana.jp/sonateaquattro.pdf)
- 3 出版社表記はフィレンツェ支店を含む Milano, Gio. Ricordi - Firenze, Ricordi, Pozzi e C^o (従来文献の刊年推測は1825-26年)
- 4 全集版序文 p. XXXVI。以下、この序文を基に記述する。
- 5 その後ウィリアム・ハイマン・カミングス (William Hyman Cummings, 1831-1915) の個人コレクションを経て、1919年に議会図書館に買い取られた。